



佐々木 英輔

汚染・貧困 抜け出す道は

京都市にある総合地球環境学研究所（地球研）の道はたにある斜面には、インドネシアのヤシの繊維で作られたネットが張られている。スラウエシ島北部のゴロンタロ州で、現地の人が繊維をつむぎ、10分間隔で編み込んだ。土砂流出を防ぐ効果や耐久性を確かめているところだ。

これは「貧困と環境汚染の悪循環」を絶つ研究プロジェクトの一環だという。水銀汚染の原因になっている金採掘に代わる、新たな生業を根づかせることを目指している。

「お金を得るため、違法で危ない仕事をやらざるを得ない状況に追い込まれている。社会の構造自体を変えなければ、貧困の問題も環境汚染も解決しない」と地球研の榊原正幸



地球研に設置されたサトウヤシの繊維によるネット
＝いずれも榊原教授提供

教授（愛媛大教授）は言う。

地球規模で広がる水銀汚染。排出源の4割ほどは途上国などで続く小規模な金採掘によるものだ。砕いた金鉱石や砂金を水銀と混ぜて合金にし、熱して水銀を蒸発させ金を取り出す。簡単な道具ででき、手取り早くお金を得る手段になっている。

しかし、水銀は作業する人の健康を脅かす。蒸気や残土を通じて環境中へ広がり、生態系を介して私たちの口にも入ってくる。

水銀を規制しても、ほかに稼ぐ手段がなければ、かいくぐって続いてしまう。環境や健康を犠牲にする別の仕事に移るかもしれない。そこで持続的な産業づくりがかぎになる。

サトウヤシの繊維で作ったネットは強度があり、斜面の覆いのほか、ゴーヤなどの植物をはわせる「緑の



伝統刺繍を施したハンカチ

カーテン」にも使える。劣化が問題になるプラスチック製品と違い、日射に強く、いずれ土にかえる。

輸送費が課題だが、脱プラの流れのなか、日本の企業や学校でも試している。お金になる資源との認識が現地で広まれば、社会はおのずと植生を守る方向へと向かうだろう。

榊原さんの元々の専門は岩石学。ヒ素など地質由来の汚染物質問題を扱い、留学生が来ていたインドネシアの課題にも取り組むようになった。実践を通じて感じるのは、住民、企業、専門家など様々な関係者がフラットにコミュニケーションを取り、信頼関係を築く大切さだ。

「環境汚染は人間が起すので、人間を抜きには語れない。封じ込められるかどうかは、技術の問題ではなく人間次第なんです」

プロジェクトでは、現地に伝わる伝統刺繍「カラウオ」を生かした産業づくりも模索する。布の糸を抜いて縫い込む細かな技法で、日本の刺繍団体や専門店の協力を得て、ハンカチや京扇子の模様に生かす。

7月には京都市と愛媛県西予市で展示会を開く。環境と貧困の課題解決につながるだけでなく、両国が培ってきた文化の交流や融合にも期待しているという。

（編集委員）